

Oshima
Letter

大島レター

6



March
2019



表紙のお話

かりんは、バラ科の落葉樹で、春には薄紅色の美しい花をつけ、秋にはとてもよい香りのする黄色の実がなります。大島のかりんの木について、入所者さんにお話を聞くと、園内にある「京都愛の光庭園」南側の木は貞明皇后から贈られたもので、戦前に大島で発行されていた雑誌「藻汐草」によると、1941年(昭和16年)の夏に植えられ、2年後に初めて実がなったようです。また、「風の舞」の北側にある木は、ある亡くなった入所者さんが植えたものだそうです。ずっと昔から、大島とともにあったかりんの木。これからも、大島のことを見守り続けてほしいです。(写真・言葉：白神基広)



目次

へ 最近の活動紹介 へ

「大島のマップをつくろうワークショップ」

3

へ 寄稿文 へ

歌手 おおたか静流

5

鳥取市立大村地区公民館 森田 美代子

7

台湾歴史資源経理学会 丘如華

9

へ 連載コーナー へ

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

10

編集後記

～最近の活動紹介～

「大島のマップをつくらうワークショップ」

高松市は、これまでの瀬戸内国際芸術祭の成果を活かし、アートを切り口とした交流を促進するために2016年から大島でワークショップ事業を開催しています。

今回は、高校生を対象に高校生の視点で大島の魅力を見つけてもらい、それらをもとに大島のマップを作ろうという内容でした。講師は、ファシリテーターの谷益美さん、グラフィックレコーダーの和波里翠さん、そしてマップをデザインする大池翼さんです。1泊2日の行程で、谷さんが進行し、和波さんが高校生が学んでいく様子をイラストでうまくまとめられました。

まずは、みんなに大島を知ってもらうために島内巡りをしました。納骨堂や風の舞



塩谷 麻乃さん

入所者さんが元気で明るく笑顔で話してくださったのが印象的でした。古い写真を通して大島の歴史を知ることできました。



宮下 文直さん

10年前から大島に通っていますが、泊まったのは初めてでした。今まで知らなかったことを学ぶことができた。本当に有意義な2日間でした。



石床 幸那さん

また大島に訪れることができ嬉しかったです。野村さんからしか伺えないようなお話がたくさんありました。



などを巡ったあとは、気になった場所や建物などを撮影し、撮った写真を発表していました。「なぜその写真を撮影したのか、どう感じたのか」を質問すると、それぞれ視点の違い、多様な感想も聞くことができ、新鮮な気持ちになりました。

入所者さんに昔の写真を見ながらお話を聞く場面では、自治会の森さんと野村さんに来ていただき、当時の暮らしやお二人が入所したときのこと、ハンセン病に対する考え、瀬戸内国際芸術祭のこと、将来の大島青松園のことなどをお聞きしました。目の前の高校生たちに、口から口への島の記憶を語り継ぐような、そんな熱のこもったお話がたくさんありました。最後は、入所者さんから聞いたお話のまとめと、2日間の感想を発表。参加した高校生たちとも大島についてじっくり話ができて、みんなで新しい大島を発見したワークショップとなりました。



中條 那子さん

入所者さんの穏やかな笑顔が印象的でした。温かくて、明るい島。これからはずっとそうあってほしいと思いました。

末原 幸統さん

歴史をありのままに伝え、より多くの人が大島を身近に感じてもらえるよう、大島での発見を身近な人に紹介していきたいです。



石井 乃々華さん

大島に泊まったのは初めてでした。ワークショップの内容も普段できないことを体験でき、良い経験になりました。

写真:大池翼 イラスト:和波里翠



歌手
おおたか静流



Photo : Shintaro Miyawaki

大島との出会い

2 011年に「大島あおぞら市(瀬戸内国際芸術祭実行委員会主催)」で、田島征三氏のライブペインティングに参加させていただき、大島青松園ともご縁ができました。その後「大島へ行こう!アートと自然を楽しむ子どもサマーキャンプ(高松市主催)」でワークショップをさせていただいたり、コンサートで歌わせていただいたり、大島とは嬉しい交流が続いています。

ハンセン病のことを初めて知ったきっかけは、高校生の時に読んだ、北條民雄の『いのちの初夜』。彼は18歳でハンセン病と診断され、故郷を離れ、東京都内にある現在の国立療養所多磨全生園に送られました。入所した最初の夜について、その悲しみと嘆きが綴られたこの本に言葉を失う程の衝撃を受け、涙し、その後の私の人生において、一つの大きな課題ができました。

差別とは?人権とは?

ハンセン病による差別と隔離、その後の人権回復運動の歴史は、社会のあり方全てに繋がる問題点として私の中で重要な位置を占めています。

世界を見渡せば、人種差別、民族差別、性差別、障害者差別……、差別は至る所にはびこっています。でも人

は生まれながらに差別する生きものではないはず。正しい目を持つ反抗の力は、知恵と勇氣と団結を得て、大きな壁を壊すことができます。歴史が物語っています。

しかしながら、歴史は時とともに葬られてしまいう可能性があります。戦争が何度も繰り返されるように、差別も繰り返される危険性があるのです。悲劇を繰り返さないために、注意深く真実を語り継ぐことが大切です。文字で、道具で、写真で、映像で……。言葉や映像はあらゆる苦しみを証言するでしょう。使い古した道具達は無言の涙を流して訴えるでしょう。

でも、更にそこにアートの独創性が加わると、地面をひっくり返したように、いつきに地球規模でメッセージが広がるから不思議です。アートは泥沼のような場所からも、そこから這い出るようにして発芽します。表現のエネルギーは、負の底からも噴出します。ほんの小さな塵のような希望でも、人は救われるのです。そしてその希望の光を司るのがアートです。涙は宝石になり、血は絵の具になり、歌は花になります。

2019年4月下旬には、一般定期航路が大島に就航するという嬉しいニュースが入りました。これから

＜ 寄稿文 ＞



は沢山の人がどんどん大島に渡り、子どもも一緒に手を取り合ってアートを楽しめたらと思います。大島に
いっぱい笑顔が溢れますように！
そしていつの日か……心を繋ぐささやかな歌の懸け
橋になれば嬉しいです。

Photo : Shintaro Miyawaki



大島との出会い

私 たちは、鳥取県の東部に位置する鳥取市用瀬町大村地区、人口1300人余りの地区に設置された、生涯学習の拠点「鳥取市立大村地区公民館」と、住民自治による地域づくりを目的に組織された「大村地区まちづくり協議会」の共催団体です。視察のきっかけは、「香川人権研究所」のホームページです。様々な差別事象の中に『ハンセン病苦難の島』という題名が目に入りました。ハンセン病については、岡山県にある長島愛生園に用瀬町出身の方が入所されており、2000年に『ようこそお帰りなさい！』ハンセン病差別の現実から学ぶ』と題した用瀬町民集会が開催され、近くて遠かった故郷への思いを対談型講演会でお話をしていただきました。講演会後も、町をあげてハンセン病の歴史について学ぶ機会を持っており、入所者の方々との交流も続き、長島愛生園にも何度か訪問させていただいた経緯がございます。島内の見学や、資料館では入所者の方が記録として残されたビデオを拝見しました。ビデオには当時の強制隔離の悲惨さや入所後の生活の過酷な状況が語られており、視察の参加者は胸を打たれ、改めてハンセン病への間違った偏見や差別をなくす事を誓う

機会となりました。

今年度もハンセン病についてさらに理解を深めることを目的として、2018年11月17日に大島青松園を訪問しました。大島の港に着いて、まず最初に目に入ったのは、島を守っているかのごとく、ドツシリとした大きな松でした。手入れの行き届いた松や、整備された道路・施設を見るかぎり、間違った政策により人生を奪われた悲惨な状況との大きな落差を感じました。こえび隊の笹川さんに「納骨堂」「石仏ミニ八十八ヶ所」「荒廃した畑」「風の舞」「解剖台」の順にガイドしていただく中で、一人2畳程度しか与えられない劣悪な生活環境や、入所の経緯を理解できぬまま、無念の思いを石仏に手を合わせて祈ることとで生きることに希望を保ってきた姿、モニュメントに込められた自由への思い、間違った優生保護法の憤りなど、様々な辛い思いに触れることで、改めて今なお残る偏見や差別に対して、自分に出来る範囲ですが声を上げる勇気をいただきたい思いでいっぱいです。現在は整備され、まるで避暑地のような景色とは相反した島の歴史は、本当に心に響く、心に残る学習となりました。

< 寄稿文 >

研修の最後は香川人権研究所に立ち寄り、1時間余りユニバーサルデザイン等について深く学習させていただきました。往復4時間の道のりでしたが、とても有意義な研修となりました。



丘如華

瀬

戸内国際芸術祭が初めて開催されたのは2010年。世界的課題である少子高齢化という社会問題に取り組むことを目標にしている芸術祭です。2000年以降3年に一度開催されている越後妻有「大地の芸術祭」の成功が契機でした。2013年、総合ディレクター北川フラム氏の招聘でアジア地域のコミュニティが瀬戸内国際芸術祭に加わり、小豆島福田にある「福武ハウス」に7か国の団体が集結しました。私が主宰する台湾歴史資源経理学会も参加し、さまざまな芸術作品や活動を通じた文化交流が行われました。以来、キュレーター、芸術家、建築家、行政官、そして台湾のボランティア集団「小牛隊」がアジアアートプラットフォームプログラムを通じて、瀬戸内地方を毎年訪れています。

私は、瀬戸内の訪問を通じて、大島を瀬戸芸の会場に加えることを主張した北川氏に深い感銘を受けました。世界各国から集まる観光客や若者、そして学生に、ハンセン病療養所であった隔離と差別の歴史につい

て学んでもらう機会になるからです。

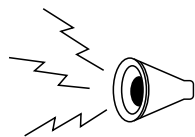
台湾において、私は台湾のハンセン病療養所 樂生療養院 (Losheng Sanatorium) の保存を提唱してきました。遺憾な歴史の一部が二度と繰り返されないようお願い、人類が無知によって取り返しつかない間違いを犯した事実を忘却させないためです。

今では瀬戸内国際芸術祭を通じて、大島とその過去を直視し、歴史を知り、こうした唯一無二の経験を通して世界各国の人々と意見交換し、交流することができるようになりました。アジア地域には、フィリピン、マレーシア、台湾、日本、マカオ、タイなどに、類似の療養所が多数存在しています。近い将来、樂生療養院や大島青松園のようなアジア地域のハンセン病療養所が様々な工夫と機会を活用して協働し、次世代を教育し、この歴史上の過ちを地域内協力へ、つまり負から正へ転換できるように、心から願っています。

台湾歴史資源経理学会

2004年に創設。近隣地区の有形・無形な生活文化の理解・コミュニティ活動の情報を提供し積極的な参加を促し、関心や行動を呼びかける台湾のNGOです。現在は、台湾ならびに国際社会において都市部の住民が近隣地区や地域社会とのつながりをさらに深めることに最大の関心を持って活動を展開しています。学会では、地元社会の記憶と独自性を大切にしていける活動を通じて、多様性と人間性を重んじる相互尊重の心を促すことでアジア独自の文化を尊ぶことに貢献できると考えています。

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」



大島には入所者同士で結成されたさまざまなクラブがあります。

盛んだったころのクラブの一つに「カメラクラブ」がありました。世の中の写真ブームの波にのり、1959年（昭和34年）に結成されました。発足後は自治会主催の文化祭に毎年出展し、会場の雰囲気盛り上げていたそうです。

今回は、カメラクラブに所属していた、脇林清さんにカメラのお話を聞きました。

カメラを最初に持ったのは、今から約50年前です。思い出に残せるものがあれば撮ってみようということで始めました。今は多くの方がやっていることですが、私が始めた頃はまだ珍しかったように思います。本格的に写真を撮りながら、気付き始めたことがあります。それは、思い出を撮るだけに留まらず、撮ることによって真正面から自然そのものと向き合えるようになったことです。本格的にのめり込んでいくきっかけにもなりました。今はカメラが生活習慣病みたいになり、カメラを持っている限り被写体を常に見えています。大島で普段通っている場所や繰り返し通っている山道でも、いろんな昆虫類や草木の在り方があり、思わぬところで新たな発見があります。決して、同じものを毎日見ているという状態では全くないということです。一瞬一瞬を自然が生きているところまで、気付くようになりました。私の考え方は、カメラを持つことでいろんなものと直接向き合え、視野が広がり深まってきました。そういう意味では、カメラを一生手放すことはできない。最期の呼吸のときまで持っていたいなと思います。



編集後記

いよいよ瀬戸内国際芸術祭
2019が4月26日から始ま
ります。今年の瀬戸芸は、海外の
メディアに取り上げられること
も多く、例えば米紙ニューヨーク
タイムズのオンラインサイトで、
2019年に行くべき52カ所の
7番目に瀬戸内の島が選ばれ
たり、英国の雑誌で今年注目の
場所一位に「Setouchi」が選ばれ
たり、瀬戸芸をはじめ瀬戸内の
魅力が紹介されています。前回
以上に海外の関心度も高まり、
大島にも世界中から多くの方
が訪れることでしょう。今回の
大島レターでは3名の方に寄稿
をお願いし、「大島の出会い」を
テーマに書いていただきました。
さて、今年はどうな出会いがあ
るのでしょうか。今から楽しみ
です。

大島レター 6 2019年3月31日 発行 高松市
編集協力 国立療養所大島青松園、大島青松園入所者自治会
編集 こえび隊（笹川尚子、甘利彩子、北川フラム）
問い合わせ NPO法人瀬戸内こえびネットワーク 〒760-0019 香川県高松市サンポート1-1
TEL087-813-1741 FAX087-813-1742 info@koebi.jp www.koebi.jp